

従つて教判に於ては「大日經」を如何に取扱うかは日本天台独自の教判を展開せしめざるを得なかつた。更に他の特色の一つは戒律の點である。中國天台では戒律は二百五十の小戒であつたが、最澄は小戒を捨てて圓教菩薩の大戒を主張した。又觀心に關しては中國天台の正統は妄心觀で六絨心王芥爾陰妄の心を對境としたのに對し第八識を對境とし、延いては本覺思想の強調となつたのである。これ等日本天台の特殊相を、教判・觀心・密教・圓頓戒に分けて述べてある。

「實踐的性格の客觀的投影が天台宗であり、依人立宗として異彩を放つてゐる」のが天台宗である事を思へば、教觀雙美を誇る天台宗に於て如何に實踐門が重要であるかが解る。明治以來の科學的學問方法による結果五時教判の如きものが史的事實に反すると否定され乍らも、尙且つ近代的價值をもつ所以が、法華經に基づく菩薩道としての實踐的價值によるものなる事に注目して、再び天台教學の上に反省の目を注がねばならぬ。従つて天台教學を説く場合にも唯單に平面的

に述べるだけでなく、之を立體的に、教相と觀心、教理と實踐を相互關連的に述べる事が必要であつて、諦觀の「四教儀」に教相觀心の分けられて以來、未だかゝる要求を満たすものを見ないのである。本書もこの點に關しては從來の書の埒外に出ずるものではない。

本書は既に基礎學を終へたものを對象としてゐるやうであるが、天台特有の用語や人名で注意を要するものについてはルビを附して初學者の爲に細い配慮が加へられてゐる。更に古來の天台教學上の主要な論題の殆んど全てに互つて言及されてゐる事は進んで専門的に研究しやうとする者にとつて良い指針となるであらう。

先きの「天台教義概説」では引用文は原文であつたが、本書は書き下し文になつてゐる。これは著者の深い思慮によるのであらうが、併し、これだけの程度を有する書であるから、矢張り原文の儘であつた方が良くはなかつたか。欲を云へば引用書の丁數をも示してほしかつた。又將來、深く研究する者の爲に註を一層

増加されたら更に便宜ではないかと思ふ。

卷末の索引は上杉博士の「日本天台史」、島地大等氏の「天台教學史」の索引と共に研究者に非常な便利を與へるものであるが、著者が本文中で處々に特に留意されている古來の論目などは更に詳細に注意して採擇されたら一層完全なものとなつてらう。

それらは兎に角として、近代の新しい學問方法の脚光を浴びた天台教學が要望されてゐた時、本書は確かにその方向に向つて一步を進めたものとして推稱したいと思ふ。百華苑三〇〇頁、三八〇圓。(太田崑夫)

◇般若經の哲學と宗教

鈴木大拙著
杉平顯智譯

大拙先生著作禪論第三卷中の第五及び第六論文の邦譯である。著者も著作も改めて紹介を要しないであらうが、原著が英文なるため却つてぢかに讀んだ人は少

ないかも知れない。幸ひ杉平先生により大拙先生の特異な表現方に直接接するが如く譯出されて近づき易く讀み易くせられた。(二十五年十一月刊・A5一六一頁・一八〇圓・法藏館)

◇眞の宗教に就いて

聖アウグスティヌス著
大谷 長 譯

聖アウグスティヌスの餘り知られてゐない小著「眞の宗教に就いて」の邦譯である本書は、眞の宗教がキリスト教であり、即ちカトリック教會以外の教派にも異教徒にも求められないこと、唯一の眞なる神はこの眞の宗教によつて崇められることを述べる。原著ラテン語よりその困難なる邦譯を決意せられた譯者の積年の勞作である。(二十五年十二月刊・A5二〇〇頁・二〇〇圓・ヴェリタス書院)

◇現代中國辭典

中國研究所編

自然環境、國際關係、政治・經濟、社會・文化、文學・藝術、歴史の六部門に従つて構成的に排列し、現代中國の全貌を忠實平明に解説して、單に中國研究者

のみならず、廣く國民の各層に、現代中國を理解する爲の手引たらんことを主旨として編纂した中國百科全書の役割をなす書、執筆には夫々の専門家五十九名が當り、末尾に人名辭典、新中國法令集、中國近代史年表、中國關係研究所一覽が附せられてゐる。(二十五年九月刊・B5七七七頁・二五〇〇圓・中國辭典刊行會)

◇初期ベーダント哲學

(印度哲學思想第一卷)

中村 元 著

著者の研究業績が集大成され、この度インド哲學思想全四卷にまとめられることになつた。これはその第一卷である。大別すれば、(一)ベーダント哲學の意義(二)インド諸學派の見えベーダント哲學が收められ、(三)は主として佛敎經論のなかよりベーダント哲學關係の資料が紹介研究されてゐる。(二十五年九月刊・A5九三六頁・九〇〇圓・岩波書店)

◇ウパニシャッド文學と

其の哲學思想

佐保田鶴治著

ウパニシャッド文學と其の哲學思想の内容を單に叙述したものでなく、特にこれを神祕思想にありとして、その神祕的體驗の光景を文獻をまとめつつ描寫したるもの。一ウパニシャッドの思想、史的意義二、ウパニシャッド文學の概観、三、ウパニシャッドの哲學思想(1)神祕思想(2)形而上學(3)人間論 尙著者は、これによつて神祕思想そのものの理解にも資するところあらんとしたと云はれてゐる。(二十五年十月刊・A5一四八頁・一五〇圓・白揚社)

◇パーリ語文法

東元多郎著

立花俊道氏校閲の下に、簡潔なる説明によつてまとめられたパーリ語の小文典である。本文は、字母・發音・音便・名詞・形容詞・數詞・代名詞・動詞・不變化詞・接頭音・合成語法・接尾音の十二章に分れ、例示を多く記載して勉學に便ならしめてゐる點がその特徴である。又巻尾にはパーリ語文字の比較一覽表、並びにパーリ語三藏目錄を收録してゐる。(二十五年十月刊・謄寫刷 35×25cm 九

二頁・附錄九頁・駒澤大學バリー文學研究會)

◇バリー語佛教常用聖典解説

東元多郎 編著

セイロン、ビルマ、シヤム等に於いて常用せられているバリー語の聖典を在家用と出家用とに分けて、夫々の聖典の解説と原文と和譯とを収めたもの。末尾に護咒の解説もある。(二十五年十二月プリント刊・B5一六九頁・三〇〇圓・駒澤大學バリー文學研究會)

◇彌陀身土思想展開史論

神子上恵龍著

彌陀の佛身佛土觀の發達變遷を究明せんとせられるもので、龍樹・曇鸞・道綽・善導・源信・法然の淨土教先覺者を初め、淨影・天台・嘉祥・賢首・慈恩等の聖道諸師に互つてこれを検討し、更に西・鎮・今三家の説にも及び、以て親鸞聖人の信仰的體驗的把握こそこの展開史の最後の段階を飾るものと歸結せられる。(二十六年一月刊・A5四三七頁・三八〇圓・永田文昌堂)

◇清澤滿之先生

西村見曉

清澤滿之先生の著作や書翰を初め、傳記的な資料等參考文獻をもとに、誕生から往生まで年代を追ひつゝ凡そ五項目に大別し、先生の信境展開の過程をあとづけ且つ世界文化史上に於ける先生の地位を明かにせんとして著されたものである。(二十六年三月刊・A5三六二頁・四〇〇圓・法藏館)

◇暴風駛雨

曾我量深著

雑誌『精神界』に執筆されたものを集録したもので、著者自ら隨筆であると言つておられるが、宗學的な問題や佛教學的な問題も多く述べられてゐて、曾我量深論集別巻とされてゐる。(二十六年二月刊・B6三六〇頁・三五〇圓・丁字屋)

◇經書の傳統

平岡武夫著

天下的世界觀、漢字の藝術性、漢字をつづる文章の形式の三要素が、經學、史學、文學、書道の四分野において、如何に作用してゐるかを目的とされて居り、

叙述に當つては、原文の引用には譯文を附し、個有名詞にはルビを附する等、親切なる體裁、獨自の類型を以てしてゐる。末尾に尙書百篇の篇目表、歷代王朝表、及び索引を附録し、既刊の「經書の成立」(一九四六年、全國書房刊)と共に、中國古典を通じてシナ精神を理解せんとした雄篇。(二十六年一月刊・A5四七七頁・七〇〇圓・岩波書店)

◇新編眞宗大系

第五・六・十・十八・十一卷

稻葉圓成・安井廣度監修

第五・六卷は香月院『註論講苑』上・下を(續大系第二・三卷)、第十卷は開悟院『高僧和讀丁亥記』(大系第二十卷)を、第十八卷は史傳部上(續大系第十五卷)を、第一卷は香月院『淨土和讀已未記』(大系第十九卷)を、それら綿密な校訂の上再刊されたものである。(二十五年六月、九月、十月、十一月、二十六年一月刊・A5各四三八・二七九・二九四・一〇六・四八一頁・各冊四〇〇圓・眞宗典籍刊行會)